

システム情報工学専攻	学籍番号	881601	指導教官氏名	三宅醇
申請者氏名	池田 朋子			大貝彰
				渡辺昭彦
				加藤彰一

論文要旨 (博士)

論文題目	都市・自然景観イメージの小説解読手法に関する研究 (要旨和文1200字程度)
------	---

本論文では、従来の都市の景観計画・設計の概念に不足していた景観イメージに対する知見を得るため、文芸作家による小説を素材に、都市・自然景観イメージを解読する手法の開発を試みるとともに、記述された景観の構成と構成要素の特徴、付随するイメージの解明を行っている。本論文の目的は、(1) 小説に書かれた景観イメージを読み取る手法の開発 (2) 提案、開発した手法を実践的に応用し、景観の構成と構成要素の特徴、付随するイメージを具体的に明らかにすること の2つである。

第1章では、手法論開発上の基本となる指針を得るため、1976-95年に発表された67の言説を分析対象とした空間イメージ研究の手法を比較考察し、分析手法は分析対象のテキスト形式に左右されること、小説というテキスト形式は定量的分析よりも定性的分析が容易であるが、両者の組み合わせによる分析も可能であることを示した。第2章では、第1章で得られた知見に加え小説の持つテキスト特性を考慮して、景観イメージを小説から解読する手法の基本的枠組みを導出、提示した。具体的には、テキストを舞台、場面、着目点のシークエンスで分割し、デノテーションによる定量的分析とコノテーションによる定性的分析を組み合わせる手法の妥当性と可能性を示した。

第3章から第5章では、導出した基本的枠組みを実際的小説に適用することで実践的手法論へ展開し、その有効性を検証すると同時に、小説から解読される都市・自然景観イメージに関わる知見を得ている。まず第3章では、都市小説としての評価が確立している『城のある町にて』一作品を対象に、テキスト中の延べ語数を定量的に把握し、最も多かった「城跡」の景観を対象に、場面の単位の設定、頻出場所の景観構成や要素、付随するイメージを位置図、イメージ画等を用いて定性的に解読した。読み取られた景観の特性から、景観は時間とともに変化し、また視覚のみでなく聴覚や触覚によって総合的に捉えることの必要性を示唆した。第4章では、一都市を舞台とした複数の作家の作品を対象に手法論の展開を図るため、高山の地方文学賞受賞作品群を用い、第3章で実践された手法に改良を加え、「詞句」の単位で景観要素を抽出、その頻度や傾向を定量的に分析した。次に作品相互で共通する景観要素の場面、景観構成とイメージを文脈レベルの定性的分析で解読した。これらから高山らしさを代表する地域景観を具体的に示し、また小説というテキストのモデル形成機能を確認した。第5章では1970-94年の芥川賞受賞作品群を用い、多作家による不特定の場を舞台とした多作品から近年の自然景観イメージとその変遷に関わる知見を得ている。手法論的には、東京と地方、まちといなかといった舞台分類と年代区分により、自然景観要素の出現動向を定量的に把握した。次いで視点場、視対象、景観の構成、付随する心象を要素毎にデータベース化し、託された意味の定性的解読から、自然景観の種類の変化や自然景観の多様性の意味レベルでの喪失等、景観計画・設計の方向性に関する示唆を得た。終章では、本研究の総括を行った。